

2020年4月の一般公開に向け、アイヌ文化の復興等に関するナショナルセンターとなる民族共生象徴空間（象徴空間）の整備が北海道白老町において進められています。象徴空間の意義やアイヌ文化等の魅力を共有し、国際的な協力体制の構築を図るとともに、広くアイヌ文化復興の動きとその理解を深めるため、政府主催として初めての先住民族国際シンポジウムを開催しました。

当日は、関係者をはじめ多くの方々にご来場いただき、第1部のパネルディスカッションでは、ニュージーランド・マオリの方々やアイヌの方々をパネリストにお迎えし、それぞれの言語や文化の復興に関する取組などが紹介されました。

また、第2部の先住民族交流では、アイヌの古式舞踊やマオリの伝統的舞踊などが披露され、会場が一体となって楽しみました。

## 開催概要

### 先住民族国際シンポジウム

テーマ： 「アイヌ文化復興に向けて～ニュージーランドから学ぶこと～」

○日時： 平成29年11月25日（土）13：30～16：00

○会場： STVホール（北海道札幌市）

○主催者： 内閣官房アイヌ総合政策室、国土交通省

○来場者： 約200名

○プログラム：

- ・主催者挨拶 内閣官房アイヌ総合政策室長 平井裕秀
- ・来賓挨拶 駐日ニュージーランド特命大使 スティーブン・ペイトン  
北海道知事 高橋はるみ  
公益社団法人北海道アイヌ協会理事長 加藤 忠

会場内の様子



加藤理事長からマオリの方へ工芸品の贈呈



### 【第1部 パネルディスカッション】

<コーディネーター>

- ・佐々木史郎（国立アイヌ民族博物館設立準備室主幹）

<パネリスト>

- ・ウィリアム・フラヴェル（ラザフォード高校マオリ学部長）
- ・ジョシュア・ファレヒナ（ギズボーン地区議会議員）
- ・北原次郎太（北海道大学アイヌ・先住民研究センター准教授）
- ・八幡巴絵（一般財団法人 アイヌ民族博物館学芸係長）
- ・平井裕秀（内閣官房アイヌ総合政策室長）

### 【第2部 先住民族交流（先住民族文化の相互交流）】

アイヌの古式舞踊、マオリの伝統的舞踊の披露等



来賓挨拶  
ペイトン大使

マオリはニュージーランドの社会、文化、経済などに大きな貢献をしている。アイヌとマオリの関係性をこれからもますます深めていき多くの皆さんに関わってもらえるよう、大使館としても北海道の皆さんと協力関係を構築していきたい。



来賓挨拶  
高橋知事

マオリの方々との交流を深めるとともに、両地域間の一層の関係強化につなげていきたい。アイヌ文化の素晴らしさを国内外に発信するとともに、北海道の食や観光などの様々な魅力を知ってもらい、それらの理解を深めていきたい。



来賓挨拶  
加藤理事長

象徴空間をどのように機能させていくか。2020年以降先住民族の位置付けにより政策実現の正念場を迎える。積極的かつ前向きなマオリに学び、先住民族の歴史などを語り合い、文化の交流を深めることは相互共通と信頼を育む。

## パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、マオリ、アイヌ、それぞれの立場から言語、文化の復興に関する取組などを紹介いただきました。また、主催者の内閣官房アイヌ総合政策室より民族共生象徴空間の概要を説明しました。



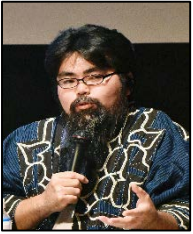
ウィリアム・フラヴェル  
ラザフォード高校  
マオリ学部長

ニュージーランドでは英国人の入植が進んだことによりマオリ語が軽視され、マオリは言語と文化を失った。マオリ語を復興させるために、幼稚園、学校で理科や算数などをマオリ語で勉強するプログラムを作り上げた。今後は日常生活でのマオリ語の使用、マオリではない人々のマオリ語の普及に対する役割などに取り組んでいきたい。



ジョシュア・ファレヒナ  
ギズボーン地区  
議会議員

言語を失うことは文化を失うこと。子どもの頃、マオリの文化が失われ、家族、地域は成立していなかった。この状況を変えるため地方議員になって活動をしている。自分たちの子どもを自分たちの文化の中で育てることにより、伝統的な知識の体系が多くの人に伝わり保持されていく。政府側もそれを理解しながら一緒に進めていくことが重要。



北原次郎太  
北海道大学  
アイヌ・先住民研究  
センター准教授

アイヌの言葉、文化は北海道への本州からの入植者により衰退していった。アイヌ語やアイヌ文化が消えないうちに古い記録を掘り起し、自分たちのものとして取り戻してから普及に取り組んでいく方針に変える段階にある。一般の日本人とは違った文化的背景、プライドを持ったアイヌの人々が見えるようになることが大前提ではないか。



八幡巴絵  
アイヌ民族博物館  
学芸係長

当館では2013年から世界に向けてアイヌ文化と地域・人・文化をつなぐルイカ・プロジェクトを実施している。博物館は収蔵物などを活用してどういったアイヌ文化活動をしていくか、アイヌだけではなく関係者とも一緒に考える場所としたい。子どもたちが「自分はアイヌ」と声を大にして生きていけるよう社会づくりの貢献に関わりたい。



平井裕秀  
内閣官房  
アイヌ総合政策室長

象徴空間は、アイヌ文化復興・創造の拠点、国民の理解を深めるための拠点など、複合的な意義・目的を有する空間。日本国内のみならず海外からも多くの方々を訪れてもらい、年間100万人の来場者を目指す。いろいろな機会を通じて国民全体がアイヌの文化や言語の価値を認識することができるように国民理解の促進を図っていきたい。



コーディネーター  
佐々木史郎  
国立アイヌ民族博物館  
設立準備室主幹

パネルディスカッションの様子



## 先住民族文化交流

アイヌ民族博物館の皆さんからアイヌの古式舞踊を、マオリの方々からマオリの伝統的舞踊を披露いただき、最後にアイヌの即興歌ヤイサマを会場の皆さんと一緒に踊りました。



エムシリムセ  
剣(つるぎ)の舞

イヨマンテリムセ



ヤイサマ

ランギヌイ・メ・パパタ  
ヌーク(地球の創造  
に関する物語)

